

『書譜』の注釈4：紙面が破損する以前に記された 行数の考察と六朝時代以来の書論について

著者	廣? 裕之
雑誌名	武蔵野教育學論集
号	11
ページ	88-79
発行年	2021-10-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00001603/

『書譜』の注釈4

—紙面が破損する以前に記された行数の考察と六朝時代以来の書論について—

Annotation to *Shofu* 4: Consideration of the Number of Lines Written before the Paper was Damaged and the Theory of Calligraphy since the *Rikuchou* Period

廣瀬裕之*

HIROSE Hiroyuki

はじめに

本稿は、次の三編の論文を承けるものである。

- ①『武蔵野教育学論集』第二号所収の拙稿「『書譜』の注釈1」
2017

- ②『武蔵野教育学論集』第五号所収の拙稿「『書譜』の注釈2」
2018

- ③『武蔵野教育学論集』第九号所収の拙稿「『書譜』の注釈3」
2020

全訳については、すでに藤原楚水・田邊古邨・西林昭一氏など先達の優れた先行研究がある。西林氏の『書譜』解題によると、六篇に分け各篇の主旨を次のように記している。

「第一篇 王羲之を典型とする四賢の優劣論、第二篇 書の本質と価値、第三篇 六朝以来の書論、第四篇 執使用転の説および王書の価値、第五篇 書表現の基盤と段階、第六篇 書の妙境と批判、跋語 「書譜」著作の趣旨」

本稿「『書譜』の注釈4」は、右の一覧の第三篇「六朝以来の書論」【本文第140行目から真蹟本では第184行目まで+原拓での増補3行分】に注釈を加えたものである。墨蹟本が欠けて失われた末尾の3行の部分は明時代の原拓『停雲館法帖』より増補した。

本稿は、台北の故宮博物院蔵の墨蹟本（卷子本）を書者の孫過庭自身が当時、揮毫したと思われる紙面ごとに、章立てしている。本稿は第三篇について先賢の先行研究を参照しつつ、更に判りやすい

口語訳に努め、高等学校芸術科書道の書論の単元の授業で扱うためのポイント（要点等）を各紙冒頭に記した。

第6紙の範囲について

前号では、本文132と133行目の間の紙の継ぎ目（切れ目）から第9紙の冒頭と記したが、この用紙はわずか3行で切れている。この用紙を仮に「用紙A」とする。135と136行目の間の紙の継ぎ目からの次紙は13行続いている。今この紙を仮に「用紙B」とする。

第9紙以降、年代を経たことによる紙の劣化等で傷んだ箇所が多くなり、その上何行分が失われた箇所も2か所（表の《別紙補》D・F）みられる。よって、後の時代における補修により、切れた箇所等を継いだ箇所が存在し、単に継ぎ目のみから、揮毫当時の紙の継ぎ目を目測するのは困難になってきた。そこで、改めて原本の切れて継いだ跡等を精査して観察し、孫過庭が揮毫した当時の紙の継ぎ目の位置を考証してから進める必要が出てきた。第1～8紙までは、紙の損傷がないので、これより破損のない揮毫当時の用紙一枚の行数は、16行または17行であることが判る。第8紙の次にA紙とした「3行の紙」と、B紙とした「13行の紙」があるが、AとBの行数を合わせると16行となることから、第9紙は、破損等何かしらの理由で最初一枚であったものが、AとBの二つに分断されて継がれたものであることが推定できる。

第1紙	冒頭	最終行	行数	途中の紙の切れ目の数
1行目	16行目	16行	無	

第23紙	第22紙	第21紙	第20紙	第19紙	第18紙	第17紙	第16紙		第15紙	第14紙	第13紙		第12紙	第11紙	第10紙		第9紙	第8紙	第7紙	第6紙	第5紙	第4紙	第3紙	第2紙
									F	E			D	C			B	A						
366	349	334	317	299	281	264	248	《別紙補》	235	216	200	《別紙補》	183	166	149	136	133	117	100	84	68	51	34	17
369	365	348	333	316	298	280	263	3	247	231	215	14	184	182	165	148	135	132	116	99	83	67	50	33
								ゆえに合計	13			ゆえに合計	2			13	3							
4	17	15	17	18	17	17	16	16		16	16	16		17	17	16		16	17	16	16	17	17	17
									*二枚に切れている			*二枚に切れている					*二枚に切れている							
無	無	無	無	無	無	無	無			無	無			無	無			無	無	無	無	無	無	無

右の表から、第21紙と末尾の第23紙以外、後半もほとんどが、一枚の紙に16行か17行で揮毫されていることが判る。よって、後世の破損により紙の切れ目が更に生じたものとしても、その前後のどの紙と元来つながっていたものなのかを知るためには行数から類推することが可能であることが判った。

ゆえに、本稿では本来の第9紙8行目(全体では140行目)の第4字目から注釈を始めることとする。

第9紙にある「第三篇冒頭」のキーワードとなる語を記す。

〔ポイント1〕 當仁者(当仁者)

仁は、最高の徳を表すので、書道の神髄を体得した人という意味となる。

〔ポイント2〕 得意忘言

意は、こころ。書の極意。言は、概念。

『莊子』外物篇「言者所以在意。得意而忘言」より

〔ポイント3〕 企學者

先人の跡をつま先だつて(仰ぎ望む・敬慕して)書を学ぶ者。

〔ポイント4〕 希風敘妙

希には、「①こいねがう・②望み見る・③迎合する」の意味がある。ここでは③で、「先賢の風に迎合し」の意。

敘(叙)には「①ついで(順序だてる)・②順序を追ってのべる・③序文をかく」の意味がある。ここでは②で「妙義を順序を追ってのべる(説明する)」の意。

〔ポイント5〕 筆陣図

「ひつじんず」または「ひつじんのず」と読む。晋の衛夫人の撰

と伝えるが、王羲之、または羊欣の作という説もある。六朝時代に偽託されたものという説が強い。この名は『書譜』や、張彦遠の『法書要録』などに出てくる。内容は筆法を解説したものというが、通俗な筆法伝授にすぎない。「晋の王羲之は、筆陣図後に題し、紙は陣、筆は刀、墨は甲冑、水硯は城池、心は將軍、本領は副將、結構は謀略、颯筆は吉凶、出入は号令、屈折は殺戮とす。」【衛夫人・筆陣図並序より】などという記述がある。本領とは本質・特色のこと。颯筆とは筆がひるがえつたりゆれ動くさま。

行数

〔第9紙前号のつづき〕

「」は、見せ消し

▼節筆、◆節筆様のある文字とその字数

140	(無所従。「第二編はここまで」)	當仁者得意忘言、	▼4
141	罕陳其要。企學(者)希風		▼7
142	敘妙、雖述猶疏。徒立其工、		▼6
143	未敷厥旨。不揆庸昧、輒		▼8
144	效所明、庶欲弘既往之風		▼8
145	規、導將來之器識、除繁		▼6
146	去濫、觀迹明心者焉。代有		▼6
147	筆陣圖七行、中畫執筆		▼7
148	(「三手」、圖貌乖舛、點畫湮訛。頃見		▼4

①仁に當る者は意を得て言を忘れ、其の要を陳ぶること罕なり。學

を企つ者は、風を希ひ妙を敘ぶ。述ぶと雖ども猶ほ疏なり。徒に其の工を立て、未だ厥の旨を敷べず。庸昧を探らずして、輒ち所明を效す。庶くば、既往の風規を弘め、將來の器識を導き、繁を除き濫を去り、跡を觀て心を明らかにする者あらんと欲す。

・道を体得した人は、心(書の極意)を悟っているため、かえって説明する言葉を忘れ、その要訣を口にするのはまれである。背伸びして学ぶものは、先賢の風に迎合しその妙義を説明してみる。(しかし)いくら述べたとしても疏略(粗略・いいかげんなこと)である。ただ先賢の工夫について述べているだけで、その奥義を解き明かして述べてはいない。そこで私は、浅学非才を顧みず自分で理解している点だけを述べたい。願わくば、前賢の立派な書法を広めて、後進の才能・見識を導き、うるさいことは除き、名跡をよく鑑賞して心の中に悟ったことを明らかにしていきたいと思う。

仁に當る者(●ポイント1) 参照

罕(まれ・カン、ほとんどない。

庸昧を探らずして(庸は凡庸、昧はおろかなさま、探は程度を図ること。自分が浅学非才なのを顧みずの意。

が浅学非才なのを顧みずの意。

所明(自分で理解している点

効(効)す(いたす・差し出す

既往の風規(昔の立派な書法・書風

器識(その人のうつわ(才能)と見識

觀跡明心(跡を觀て心を明らかにする) (前賢の筆跡をよくみて自分の心の中

で悟り解明すること。

②代に《筆陣圖》七行有り。中に執筆の三手を書く。圖貌は乖舛し、點畫は湮訛す。

・世間には「筆陣圖」七行がある。その中に執筆の図には三手が描かれている。図の様相は正確ではなく、点画の説明はよくわからないところがある。

乖舛(かいせん) (正確ではないこと。

湮訛(いんぎ) (湮は、沈む・減んでなくなる。訛は、間違い、うそいつわり

◀第9紙末尾(節筆がとも多い)

少教厥旨不授庸昧邪
功に暗度るを知らばは
知る者自ら之を成る
書陳國七日中畫執筆
國報衆外無畫湮訛

第10紙

第10紙のキーワードとなる語を記す。

(●ポイント6) 諸家勢評

諸家の批評つまり作品論のこと。「勢」は索靖の「草書勢」、衛恒の「四体書勢」などを、「評」とは袁昂の「古今書評」などをさす。

〔ポイント7〕師宜官

後漢時代の南陽の人。隸書を能くした。靈帝が書を好み、天下の書家を鴻都門に徴するや隸書においてその最を得たという。

〔ポイント8〕邯鄲淳

三国時代・魏の潁川の人。名は竺。古文・篆書・八分・隸書を能くした。

〔ポイント9〕繆紉

浅黄の薄い絹を書物の帙の装丁に用いたことから転じて書物の意味となった。

〔ポイント10〕崔杜蕭羊

「崔・杜・蕭・羊」は、四人の名の略。ここでは、崔瑗・杜度のいた頃（後漢時代）から蕭子雲・羊欣のいた頃（六朝時代）までのことを指す。

①崔瑗は、後漢の人。字は子玉。

②杜度は、後漢杜陵の人。草書を善くし、章帝に称せられ、帝はその書を貴び、詔して草書を用いて……

③蕭子雲は、齊・梁の人。草書と行書を能くした。小篆諸体を兼ね備えた小篆飛白を創造したという。王献之と鍾繇を学んだ書法は天下に知られた。

④羊欣は、晋・宋の人。書は幼くから優れ、王献之に学ぶ。隸書・行書・草書の誉れが高かった。

〔ポイント11〕代記綿遠

時代を遠く隔てること。「代」は「世」字の避諱。

〔ポイント12〕藉甚不渝

藉甚にして渝（かはら）ず。

藉甚は、名声や評判が非常に盛大なさま『漢・陸賈傳』。渝は、「ユ・かはらず」改変する意。名声が衰えないこと。

〔ポイント13〕人亡業顯

人が亡くなったのにその人の業績が現れること。

〔ポイント14〕身謝道衰

「謝」には、「世を去る・死ぬ」の意味あり。道には「手段・技芸」の意あり。その人が亡くなるとその技芸の名声も衰えること

〔ポイント15〕麤蠹

糜爛（ただれくさる）したり虫に食べられたりして書いたものになくなって伝わらないこと。蠹は、虫類が「うごめく」こと。

〔ポイント16〕搜秘將盡

いくら探しても見当たらない。

行数

「一、一、一」は、見せ消ち
▼節筆、◆節筆後のある文字とその字数

148 〔第9紙末尾〕

頃見、

〔第10紙〕

149 南北流傳、疑是右軍所製。

150 雖則未詳眞偽、尚可發啓

151 童蒙。既常俗所存、不藉編

152 錄。【其有顯聞當代遺迹見】

153 【存無俟抑揚自標先後】

154 至於諸家勢評、多涉浮華、

155 莫不外狀其形、內迷其理、今◆

156 之所撰、亦無取焉。若乃師宜

.....

③頃、南北に流傳するを見るに、疑ふらくは是れ右軍の製する所
ならん。則ち未だ眞僞を詳にせずと雖も、童蒙を發啓すべし。
既に常俗の存する所なれば、編録を藉らず。

最近南にも北にも流布されているのを見かけるが、これはことによつたら王羲之の作つたものかもしれない。まだその真偽は明らかにされていないが、子供たちを啓発することはできる。すでに広く知れわたつてゐることなので、ここでは手だてとしないこととする。

常俗＝常は、ふつうのこと。俗は民衆・広く知れわたった様のこと。常俗は世間に広く知れわたった様子のこと。

藉らず^ず＝「藉^か」は手だてをすること。ここでは手だてをしないことの意

④諸家の勢評に至りては、多く浮華に涉る。外、其の形を狀るも内、其の理に迷わざる莫し。今の撰する所も、亦た取る無し。

・ 古來諸家の作品論があるが、これらは往々にしてうわべだけ華やかで実質がない。外形ばかり形容するも、（いかに絶妙なのかという）すじみちに関してあやふやでよくわかっていない。

今日の著述されたものも取るに足らないものなのでここでは取り上げない。

諸家勢評Ⅱ 諸家の批評つまり作品論のこと〔●ポイント6参照〕

浮華Ⅱうわべだけ華やかなこと

狀（かたど）る Ⅱ 形容する

理 筋 道

今之所撰は、著述するの意。現在著述されたもの（作品論）

⑤ 乃ち師宜官の高名なるが若き徒に史牒に彰れ、邯鄲淳の令范空しく縑緗に著すのみ。崔・杜以來、蕭・羊已往に暨びては、代祀綿遠として、名氏滋ます繁し、或ひは藉甚にして滄らず。

すなわち、師宜官は、高名な書家としていたずらに史書に登場するのだが、また邯鄲淳の立派な書は、書物のなかに出てくるのだが（遺墨はみられない）。崔瑗・杜度さいえん とどのいた頃（後漢時代）から蕭子雲や羊欣のいた頃（六朝時代）まで時がはるかに遠くずっと続き、書の名人はますます多くなるが、その名声は衰えず変らない。

令范リ令ハ一立派な・美しい」の意。范は「鑄型・法則・模範」の意あり。ゆえに令范は筆跡の妙

藉甚＝籍籍は、「多くて乱れている・極めて目立つ」の両意あり。名声が衰え

ないこと。

淪らず＝改変しない

⑥人は亡ぶも業顯はれ、或ひは憑いに附して價を増すも、身は謝して道衰う。加以 糜蠹して傳はらざれば、秘を搜るも將に盡きんとす。偶たま絨賞に逢ふも、時に亦た窺ふこと罕なれば、優秀は紛紜し殆ど觀縷し難し。其の當代に顯聞し、遺蹟の見存するもの有るは、抑揚を俟つ無くして、(自ずから先後を標さん。)

・人が死んだのちに業績があらわれたり、あるいは、おおいにこじつけてその人の価値が増すものがあるが、本人が亡くなると名声も衰えてしまい、そのうえ、糜爛(ただれくさる)したり虫に食べられたりして書いたものがなくなってしまう。偶然にしまい込まれた書作品が、見つかったもめつたに見られないので、優秀の評価は入り乱れてしまい、順位をつけがたい。現在(いま)はつきりと聞こえ、(有名で)遺墨のあるものは上下の品評を待つまでもない。(つまり、ここにある作品自体が優劣を示しているであろう。)

憑＝盛大な様・おおいに 附＝一致する・こじつける 身＝本人 糜蠹(びしゅん)＝糜は、「ただれる・崩れる」意。蠹(しゅん)は、「虫類がうごめく・さわぐ」意。【●ポイント15参照】。くさったり虫に食べられたりして書いたものがなくなつて伝わらないこと。

絨賞＝絨は、とじる・ひもで縛る・しまい込むの意味。賞は、褒美の品。

紛紜(ふんうん)＝乱れ入り混じる意。

觀縷(らる)＝こと細かにする意。

第11紙

第11紙のキーワードとなる語を記す。

【●ポイント17】六文

象形・指事・会意・形声・転注・仮借という六書のこと。

【●ポイント18】軒轅

黄帝のこと。

【●ポイント19】八體

「説文解字」の序によると、大篆・小篆・刻符・虫書・模印・署書・殳書(兵器に書きつける書体・殳は、ほこの意)・隸書

【●ポイント20】嬴正

始皇帝のこと。嬴政。「嬴」は秦国の姓。「政」は「正」に通ず。

【●ポイント21】稽古斯在(稽古斯に在り)

稽古は、「いにしえをかんがう」と読み、「書経」堯典に、「昔のことを、資料を比べ合わせて、調べる」ことの意味として出てくる。よつて「古の道を考える」が原義であるが、のちに日本では、武芸等を習う意味となった。

行数

【第11紙】

166 (揚) 自標先後。且【心之所達不】

167 六文之作、肇自軒轅、八體之

168 興、始於嬴正。其來尚矣、厥

169 用斯弘。但今古不同、妍質懸

「一、一」は、見せ消ち

▼節筆、◆節筆様のある文字とその字数

◆ 1 ◆ 2 ◆ 1

同じ姓名の人があったとするのか。この史伝はとてもむなし
ものである。訓典（教えとなる古代の優れた帝王や聖賢の書
物）でもないし、経書（聖人や賢人の言行や教えを記した儒教
の正義。四書五経）でもないの、「あえて詮索するのはやめ
て」捨ててしまつてよいであらう。

虚誕¹でたらしめなさま。荒唐無稽なこと。

棄^き擇^{たく}Ⅱ「棄」も「擇」もする意。

まとめ

今回、孫過庭が揮毫した当時の紙の継ぎ目の位置を考証してから
進める必要が出てきたことは先に述べた。紙の損傷がない第1〜8
紙までの行数を基に、後半の損傷の多い部分の、破損して切れる前
のものと用紙の姿を推定することが出来た。六朝以来の書論につい
ての孫過庭の見解が記されているが、取るに足らないものが多いこ
とを嘆いている。

参考文献

- ・藤原楚水「註解名蹟碑帖大成」下巻 1977年1月 省心書房
- ・中田勇次郎編「中国書論大系」第二巻唐 I 1977年12月 二玄社
- ・西林昭一訳「書譜」 右書に所収
- ・田邊古邨「田邊古邨全集」第一巻 書籍「二」 平成28年2月 芸術新聞社
- ・飯島春敬編「書道辞典」 昭和51年3月 東京堂出版
- ・須田義樹編「書譜 孫過庭」 2002年6月 天来書院
- ・唐孫過庭「書譜」 中国法書選38 1988年2月 二玄社
- ・唐孫過庭「書譜」 中国法書ガイド38 1988年2月 二玄社